



# No Image

(fig.2) アンゼラム・キーファー 《西洋の黄昏》1989年 オーストラリア国立美術館 ©Anselm Kiefer

ヴォルコンスカヤの波乱の生涯を綴った伝記小説です。サザーランドはマリアの日記や家族の書簡、役所の公文書などを丹念に調査し、1825年のデカブリストの乱により流刑となった夫の後を追ひ、すべてを捨ててシベリアに赴いた勇敢な女性の生涯を丹念に辿りました。以下、サザーランドの著作にしたがって、マリアの生涯について記します。

\* \* \*

1805年12月25日、ロシア陸軍の指揮官ニコライ・ラエフスキーと妻ソフィアの間、一家にとって5番目の子となる娘が誕生しました。大きな黒い瞳と長い睫毛が印象的な女の子は、クリスマスにちなんでマリアと名付けられました。ラエフスキー将軍は当時ナポレオン戦争で活躍しており、1812年、ナポレオンのモスクワ入城を目にしたポロディノの戦いにおいて、彼の勇敢な戦いが皇帝アレク

サンドル1世に高く評価され、彼は一躍ロシアの英雄として讃えられました。ナポレオンが退位した翌年の1815年、将軍はロシア南方の部隊の総轄を命じられ、一家でウクライナの首都キエフに赴きます。国の英雄の到着は地元民の熱狂的な歓迎をうけ、街の中心部にあった将軍の邸宅は、たちまち役人や軍人、詩人や作家たちの集う場所となりました。マリアはたくさんの召使いに囲まれ、家庭教師にフランス語や英語、歌唱や舞踏を学びながら成長しました。

1820年の春、ラエフスキー将軍は娘や家庭教師たちを連れて、コーカサス地方とクリミア地方を訪れました。その道中のエカテリーノスラフにて、マリアは後に偉大な詩人として知られることになるアレクサンドル・プーシキンと出会います。プーシキンは挑発的な著作によって皇帝の反感を買ひ、首都を追われてエカテリーノスラフに滞在していました。彼は当地に到着してすぐに高熱に襲われ、ろくな治療も受けられずに衰弱していました。将軍の次男ニコライは知人であるプーシキンのエカテリーノスラフ滞在を聞きつけてやってきましたが、その病状に困惑し、医者のある父の一行にプーシキンを同行させるよう頼みました。そしてプーシキンは一行の馬車に同乗し、クリミアまで随伴することになりました。旅が進むにつれプーシキンは回復し、彼が本来の活気を取り戻すと、14歳のマリアはこのエキゾチックな容貌の21歳の詩人に興味を抱きました。プーシキンは旅の途中、黒海の波打ち際ではしゃぐマリアの姿を眺め、その時の印象を次のような詩に残しました。「どんなにあの波を羨んだことだろう／次々と打ち寄せては／愛しく君の足をなでていく／そして僕は望むのだ、あの波のように／君の愛らしい足に口付けを」プーシキンは9月の末まで行動を共にし、その間に合流した将軍の長男アレクサンドルと飲み明かしたり、マリアら将軍の娘たちとバイロンの本を読むなどして過ごしました。

プーシキンとマリアは1820年11月に、ウクライナのカメンカにあるマリアの祖母の邸宅で再会します。それは祖母の70歳の誕生日を盛大に祝う機会で、彼女の親族や友人がそろってカメンカに集いました。プーシキンはマリアの兄ニコライに乗じて、将軍一家との再会を期待してやってきました。マリアはプーシキンの来訪を喜びました。年頃の少女となったマリアは、クリミアの旅以来、プーシキンという若い男性に対して憧れを抱いていました。しかしながら、プーシキンの女癖の悪さがこの場で露呈したのか、「彼はどんな女性でも好きになる」とマリアは彼に少々幻滅してしまいました。一方でプーシキンのマリアへの愛情はその後も消えることがありませんでした。プーシキンはマリアの名を『パフチサライの泉』のヒロインに与え、チャイコフスキーのオペラ『マゼッパ』の原作となった『ポルタヴァ』をマリアに捧げました。15歳を過ぎ、黒い瞳を輝かせながら舞踏会で軽やかに舞うマリアの美しい姿は、多くの人々の注目を集めるようになりました。1823年の秋、マリアはロシアで10本の指に入る名家、ヴォルコンスキー家の公爵、セルゲイと出会います。2人はオデッサで社交界の中心地になっていたセルゲイの義妹の家に偶然居合わせたのでした。セルゲイはすぐに運命的なものを感じ、出会いの当日の晩には、早くも義妹に結婚の意向を告白しました。1825年1月12日、36歳のセルゲイと19歳のマリアはキエフで挙式し、マリアは公爵夫人となりました。マリアはサンクトペテルブルクのヴォルコンスキー宮殿で暮らし始めましたが、セルゲイと共に過ごせたのは1年のうち3ヵ月間にすぎませんでした。セルゲイは軍の任務のほかに、革命を目論む自由主義者たちが集う秘密結社の活動に奔走していたのです。ラエフスキー家にとって、輝かしい未来を期待しての結婚は、皮肉にもマリアにとって苦難の扉になってしまうのでした。[次号へつづく] (nori)

## 展覧会の舞台裏

### 作品の運搬と展示 2

以前この欄でクーリエの仕事について何回かにわたってご紹介したことがあります。作品の運搬に付き添って、その安全を確認しながら展示の状況を見届け、展覧会が終われば逆に所蔵者(館)の元に戻されるまで作品の保全に全責任を負うのがクーリエです。展示される場所の温湿度や照明、警備体制のチェックはもとより、移動中の作品の保管場所や、トラックや飛行機に載せる際の位置の確認まで、クーリエの仕事は作品輸送のあらゆる点に及びます。というわけでクーリエの仕事の重要性は展覧会主催者にとっても重々承知されてはいるのですが、一方で大変現実的な問題があります。経費の問題です。例えばニューヨークの美術館から展覧会のために作品を1点借用するとしましょう。その作品に付き添うクーリエの日本までの往復の航空運賃(通常はビジネス・クラス)や宿泊費も含めた日本での滞在費用や諸々の雑費を合わせると、一人当たりの経費は百万円近くに達します。一つの展覧会でクーリエが何人やってくるかはケース・バイ・ケースですが、10数人から20人を超える場合もあります。ということはその経費は千数百万円から二千万円を超える計算になります。展覧会の予算規模は、やはりケース・バイ・ケースですが、どれほど大規模な展覧会といえども、千数百万円から

二千万円という金額はかなりの部分を占めることになり、これはけっこう頭が痛い問題です。クーリエの仕事の重要性は承知しているものの、あまり大勢やって来られると展覧会の予算がパンクしてしまうことにもなりかねません。実際、海外の美術館から名古屋市美術館に展覧会の出品依頼があり、いったん承諾したにもかかわらず、経費がふくらみ過ぎてしまい、開催近くになって借用を断念しすという連絡が入ったこともあります。この欄で保険の問題をお伝えした時もそうなのですが、所有者がいくら貸してくれるといっても、予算の点で諦めざるを得ないというケースが最近では頻りに発生しており、予算の枠を常に頭の片隅に置きながら展覧会の内容をいかに充実させるかという高度な経営感覚が主催者には要求されます。では具体的にクーリエの場合はどうするかというと、例えばニューヨークの美術館とフィラデルフィアの美術館から1点ずつ作品を借りる場合、展示の時はニューヨークの美術館に、撤収の時はフィラデルフィアの美術館に、という具合に近い地域美術館を組み合わせで行き帰りで分担してもらい、それによって人数を半分にするというやり方があります。もちろん貸す側の美術館が同意してくれればの話ですが、先方も逆に借りる側としてこちらと同じような苦勞を重ねている場合、交渉の余地は大いにあります。そして何より大切なのは、借りる側の美術館の信頼度でしょう。あの美術館なら大切な作品を貸しても大丈夫。そう思ってもらえる信頼関係を築くことこそ展覧会実現のための第一歩なのです。(F)

## 感想ノートから

### 「ノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館所蔵 20世紀のはじまり ピカソとクレーの生きた時代」

10月18日(土)～12月14日(日)

ドイツ、デュッセルドルフにあるノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館が誇る名品の数々をお借りして開催したこの展覧会では、ピカソとクレーの作品をはじめ、シャガール、ミロ、マグリット、エルンスト、ベックマンなどの非常に質の高い作品を展示しました。感想を記していただいたノートには、ピカソ、あるいはクレーに感動したという声が多数寄せられました。「ピカソの圧倒感に較べると、クレーの絵は少々物足りない。……と言うか、これは全くの好みなのですが、『現実とぶつかったり、はり合ったり』した感のほうか、何か手応えのようなものがある気がして、私は好きです。……」と、ピカソに軍配をあげる感想もありましたが、「ついに、パウル・クレーの絵を見ることができました。感激しすぎです。ついに会えた……って感じですよ。……黒川さんの建築されたこの美術館に、クレーの絵が来ただけでも、ヤバイ(笑)」という「熱烈クレーフアン」の感想も寄せられました。ピカソとクレーという全く違った個性をもつ二人の画家は、同時代に生きた画家であり、1937年にはピカソがクレーを訪問することによって出会っています。この展覧会では、

二人の画家の個性の違いが浮き彫りになり、感想ノートにもそのことが反映されました。ピカソとクレーの作品以外にも様々な作家の作品が展示されましたが、その中でも特に注目していただきたかったのが、ドイツの画家ベックマンの《夜》という作品です。「ピカソを生で見れるということで来ましたが、ピカソ以上にマックス・ベックマンの《夜》という作品にインパクトを受けました。ものすごい(しょうげき)です。この絵でレポートを書こうと思います。」と記して下さった方もいらっしゃいました。悲惨な情景を描いたこの作品を心で真摯に受け止めて下さったこと、大変嬉しく思います。また、幻想的なシャガールの作品や、楽しいミロの作品にも人気が集まりました。それぞれのお客様が、自分のお気に入りの作品をみつけて下さったようです。23作家64点と、大規模な展覧会ではありませんでしたが、西洋の近代美術の素晴らしさを存分に味わっていただけたことと思います。(akko)



## 展覧会 現在進行形

### 名古屋市美術館 20年のあゆみ展

2009年2月21日(土)～3月29日(日)

今を去ること20年前、1988年の4月に名古屋市美術館は開館しました。20周年を迎えた今年度は、一年を通して「開館20周年記念」と銘打ち特別展を開催しています。「20年のあゆみ」展は、節目の年となった今年度

を締めくくる企画です。この展覧会では、みなさまに待ち望まれて開館した美術館のその後の20年間のあゆみを、美術館を代表する作品に照らし合わせてご紹介いたします。美術館は、美術を日常のものとするために、みなさまに美術と慣れ親しんでいただくための、さまざまな活動を行っています。これらの活動についても、その成果をご紹介したいと考えています。美術館の活動といえば、特別展がまず思い浮かぶことでしょう。残念ながら、特別展だけを目当てに美術館を利用される方が多いの

も事実です。けれども美術館にとってもっとも重要で、活動の核となるのは、コレクション、すなわち所蔵作品です。コレクションをどのように充実させ、それをみなさまにご紹介し、愛着を持っていただくか。常設展での展示だけでなく、講演会や解説会、ワークショップなどの教育普及事業も、コレクションを通して美術への理解を深めていただくことを念頭に一貫して実施されています。コレクションを充実させることは、作品を今日まで守りつづけてきた先人や今現在生み出されている作品を尊重し、私たちが文化を豊かに

することでもあります。名古屋市美術館の作品収集は開館前の1983年にすでにはじまっており、昨年ちょうど25年となりました。20年のあゆみをまとめる作業をしていると、開館にあたり、みなさまの期待と関心が強くあったことを感じます。存在することが文化不毛の地といわれた名古屋を潤すと思われていたときから、あって当たり前前の存在になった今、この展覧会がみなさまにご自分と名古屋市美術館との関係を見つめなおしていただくきっかけとなればと思い、多くのみなさまにお出でいただきたいと願っています。(み。)

## どこがおもしろい?!

今回ご紹介するのは、ジュール・パスキン(1885-1930)の《クララとジュヌヴィエーヴ》(1925年)に寄せられた来館者の感想です。

「いろんないろが、まじってて、じょうずだし、左の人は、リボンをむすんでないけど、右の人はリボンをしています。あと、左の人はくつをはいているのに、右の人はくつをはいていません。あと、右の人も、左の人も、かなしそうで、なんかかわいそうです。」(さきさん、8歳)

「2人は顔が似ていないので、姉妹でも親子でもなく、歳の離れた友達のように見えました。右の女性は何か考えこんでいる感じがして、左の女性は何かをみすえているような感じがしました。」(なつめっちゃん、20歳)

「少女なのに、子どもじゃないみたい。少女っていったら無邪気なお年頃なのでは?!なんでそんな心配そうな…。でも美化されすぎてなくて、肖像画として素敵だと思います!」(Shiinaさん、18歳)

「黒い女が『ケッコいつにはあきれた』っていうような顔、白は『あーあなたのこと好き』って顔してる。黒はおかま、白は女かもしれない(黒は足とかごついからおかまって思った。)(一航さん、11歳)

「2人の女の子が視線を落として見つめる先に何があるのか?手をとり合って2人は何を思うのだろう。ぼやけて混ざり合った背景が彼女たちの心情を反映しているよう。このままだら、まわりの世界にのみこまれてしまいそうな、疲れたような、はかない表情が印象的。」(あゆこさん、26歳)



ジュール・パスキン《クララとジュヌヴィエーヴ》1925年

「この2人の女性は、現役の娼婦とこれからデビューする女の子という関係のように思った。黒い服の女のくたびれた感じと白い服の女の子の哀しい表情とのコントラストが目を引きました。」(りりさん、24歳)

「白い服の女の子は、まずしい家庭に生まれた子で、黒い服の女の子はお金持ちの子で、2人は仲が良いけれど、親が『まずしいあの子とは遊ぶな』と言ってなかなか会えず……。ある日、お金持ちの女の子がこっそりまずしい女の子を誘って会った方がいいが、ま

ずしい女の子は『会ったことが見つかったら……』という気持ちが描かれている作品なのかと思いました。」(みーさん、17歳)

「全体的にあざやかな色を使ってあるわけではないし、ほんやりとしたイメージの割には右側の少女の顔の白さ、左側の少女の服の白さがとても美しく、輝いてみえるのは不思議な感じです。」(いとうさん、37歳)

「ほとんどピンボケ。わずかな線で人物を浮き出して、背景の色と同化する寸前って感じ。きえてなくなりそうな少女2人はなにを

想ってるのか?たぶん描いた人は男だろうが、男から見た女、それは未知なる存在。だからこんなにピンボケになるのだろう。それに2人の服が白と黒ってのも天使と悪魔って感じた。2人に近づきたいのに、その背景のように近づきすぎると、こんととした世界が待ってるのかも。」(ビリーさん、?歳)

ブルガリアに生まれたパスキンは、16歳からミュンヘンで風刺雑誌の挿絵の仕事をしてキャリアを積み、20歳のときパリへ出ます。画家になることを強く望み、フォーヴ(野獣派)やキュビズムなどの同時代の美術の流れに敏感でありながら過剰に影響されることもなく、眼に映る風物をひたすら紙に描き取っていくことを好みました。その後、第一次世界大戦を機に渡米しニューヨークを拠点にしますが、メキシコやキューバなど中南米を頻りに訪れ、市井の人々を描いた作品を残しています。

この作品に見られるような独自の表現は、彼がアメリカからパリに戻ってきた1920年ごろに確立したものです。淡い色彩と、形を把握するためのわずかな線によって描き出された二人の女性は、ポーズと視線の方向、着衣の様子が分かる程度で、その表情を詳しく読み取ることはできません。若いうちから素描に秀でていたパスキンは、外見を克明に写し取るより、彼女たちと過ごす時間やそこに流れる柔和な雰囲気やキャンヴァスに表出させることを重視していたように思えます。

どんなによく観察しても、どれほど親密に言葉を交わしても、本当の意味で他人を理解することは難しい。そんな諦めにも似た考えを持つ一方で、人との交わりを求めずにはられない。その場の空気というところのない刹那的なものを大切に画家の価値観は、どこか現代人ともシンクロするところがあって、私たちが惹きつけるのかもしれない。今回もたくさんの感想をお寄せいただき、ありがとうございました。(3)

## 美術館Q&A

「展覧会場での作品解説についての質問がいくつか寄せられています。

「絵画の解説がとても面白いです。誰がどのように書くのですか。」

「解説は絵の右手に配置しないのですか?(進行方向手前に解説が置かれていると、作品を見るのに)バイアスがかかる気がします。」

展覧会の出品作品には、作品タイトル、作家名、素材、制作年・時期などの、作品に関する基本データが何らかの形で必ず提供されます。通常は小さなパネルですが、展覧会あるいは作品によっては、作品の解説文が付く

場合があります。この小さな解説パネル、実は功罪あわせ持った曲者です。

作品の前に人がじっとたたずみ、解説文を読んでいます。読み終わると絵の存在を確認するかのよう、作品を一目見て軽くうなづきます。そしてすぐに、次の絵の前に移動し、同様の動作を繰り返します。展覧会場でのこのような光景は、残念ながら少なからず見かけます。しかしこれでは何のために展覧会に来ているのか分かりません。解説を読みに来ているのではないはず。作品を見に来ているのです。解説文がこのように利用されるだけなら、それは否定されるべき存在かも知れません。

一方、出品作品の性格によっては、ことばによる説明が不可欠な作品もあります。宗教美術の約束事もそうでしょう。また、かつては常

識でありながら今の人がほとんど知らないことが描かれている場合には、何が描かれているかという基本的な情報は必要でしょう。これすらなければ不親切と言われても仕方ありません。しかし、あまりに丁寧な説明は鑑賞の邪魔にもなります。解説文を読んだだけで、作品を鑑賞した気になってしまうかもしれません。質問でご指摘されていたように、解説を読んでからだと「バイアスがかかる」、つまり先入観にとらわれてしまう危険性があります。

また近現代の作品では「作品による表現がすべてであり、余計なことは言わないでほしい」という作家の主張もあります。

このほかにも、弊害はあります。作品の近くに小パネルを設置した場合、作品の鑑賞の邪魔になることがあります。作品によっては、

周囲にゆったりとした空間があって十分な鑑賞が可能となるものもあるのです。こうした作品の場合には、解説どころか、作品タイトルを記した小パネルさえ、視界から追いやりたくなるものです。

こうしたことを踏まえて、解説文が書かれるのです。書くのはもちろん展覧会を担当する学芸員です。通常は展覧会準備の最終段階での作業ですから、時間に追われて大変です。

大切なことは、解説文は決して絶対的なものではなく、解説を書いた人の個人的な見方の記録が混じっている可能性があるという事です。それぞれが鑑賞するための参考にとどめておくべきでしょう。それに共感をおぼえるもよし、また、いや私はそうは思わない、ということがあっていいのです。(hkk)

## 郷土の作家たち

山本富章(やまもととみあき/1949-)

1949年、愛知県に生まれた山本富章は、幼い頃、木工職人であった父の仕事場にあって廃材で遊んでいたという。手間と時間を掛けて作業を行なう父の仕事を見ながら、後に作家として立って行くにあたっての基本的な姿勢を学んでいった。愛知県立芸術大学大学院を修了した後ヨーロッパを旅するが、そこでは絵画よりもむしろギリシャ建築のもつ強さや建築美に惹きつけられた。この体験が《ゲート》シリーズに代表される、建築的要素を取り込んだ作品へと繋がっていく。80年代後半から「アゲインストネイチャー展」など、国内外の展覧会に次々と出品するようになる。また、1987年には、文化庁在外研究員としてニューヨークに1年間滞在し、研鑽を積んだ。1991年には、森の中にアトリエを建て、《Creek》のシリーズに取り組みようになる。

山本の作品の最大の特徴は、乱舞するドットにある。スプーンによって何層にも盛り込まれた絵具は、赤・黄(金)・緑・青、あるいは無彩色の白・黒に限定されており、その色彩の強烈な対比は、チベットの曼荼羅をも想起させる。そしてそこには、現世的なものを離れた神々

しさも感じられる。見るものを幻惑させるように画面に飛び散るドットの表情と、建築的あるいは立体的な要素を組み込んだ構成とが、それぞれの作品を特徴付けるように働いている。1996年に制作され名古屋市美術館で展示された《"Figaro"》は、モーツアルトのオペラ「フィガロの結婚」の舞台装置であるが、この作品において、独特の色彩を作り出すためのアクリルとメディウムの混合比が確立された。

2003年には大分市美術館にて個展が開催され、新作発表や公開制作も含めて、山本の仕事を紹介された。

1979年より愛知県立芸術大学の助手、1992年より1994年まで三重大学教育学部非常勤講師を務めた。また、現在は愛知県立芸術大学の教授として後進の指導にあたり、新たな人材を育てている。(akko)



山本富章《untitled》1987年

田中君枝(たなかきみえ/1908-1987)

田中君枝は、1908年2月17日に中国の福建省泉州に生まれる。本名は貴美子(1970年までの画名は君子)。1912年に帰国して、父の郷里(現在の名古屋市市中川区)で出生届が出された後、鎌倉に移住する。

1926年、鎌倉高等女学校を卒業後、画家を志すようになって、日本画家・松岡映丘に学びはじめ、翌年には愛知県立第一高等女学校専攻科を卒業する。1929年の第9回新興大和絵会展に《庭》が初入選して、新興大和絵賞を受賞。翌年の第10回展にも《茶事》が連続入選して、松岡映丘を顧問とする昭和子木社の第1回展にも出品する。

さらに1931年の第12回帝展には《山荘》が初入選するが、この頃から洋画への転向を望んで、洋画家・岡田三郎助や高間惣七に師事するようになり、1933年からは二科会目黒デザイン研究所で熊谷守一、東郷青児、藤田嗣治に学ぶ。1938年の第25回二科会展に《鳥籠》が初入選して、女性画家の先駆けとなり、戦前は第30回展まで連続入選する。また1940年には、二科会の前衛的な若手画家によって結成された九室会に参加して、第2回展に《化粧》などの「女性」性を濃厚に漂わせた抽象絵画を出品する。

戦後は、1947年に女流画家協会の結成に参加して、1950年の第4回展では奨励賞を受賞、1955年には委員となる。二科会でも1950年の

第35回展では35周年記念賞を受賞、1960年には会員となり、1962年の第47回展と1971年の第56回展では会員努力賞を受賞、1980年には評議員となる。

戦前は、繊細な自然観察と写実を基にした日本画から「女性」らしさを漂わせた主題による抽象絵画を制作したが、1950年頃から神話や宗教に触発された独特の自然観を背景に、重厚で多彩な油彩表現による画風で、小さな生きものたちの世界から祈りに満ちた広大な宇宙までを描いて「孤高の女性画家」と呼ばれた。(sy)

No Image

田中君枝《化粧》1940年

**展評** 2008年11月25日(火)～12月20日(土)  
中京大学アートギャラリー C・スクエア

## 山本一弥展 ノイズ

鮮やかな色で、プラスチック製品のような艶やかな質感のオブジェ。山本一弥の彫刻作品は、一見、私たちが日常的に目にしているデザインされた、消費欲をそそるように美しく陳列された様々なモノのような、無機質的で害のなさそうな心地よさ、大量消費社会に生きる私たちにとってはお馴染みの感覚を感じさせる。しかしながら、その馴染みのある感覚で私たちを呼び寄せながら、近寄って見ると一瞬、ぎょっとさせられる形態をしている。まるで、不意を打たれて見てはいけないものを見てしまったような感じだ。

鮮やかな色の上に、かわいらしいお花の模様などが施された表面は、見る者を優しく歓迎してくれているようなのに、その形は女性の手や足がちん切られた姿の上半身が上から吊られ、かわいらしい小鳥の彫刻かと思いきや、もったりした体躯の後ろはあかんべえと舌を出している口の形になっている。極めつけは、巨大な子鹿で、上半身がちん切られ、

さらに逆さまにされてどかんと置かれているのだ。うきうきするような心地よさやほほえましいような可愛らしさを思い起こさせるものが、突然それを裏切るような衝撃を感じさせる形態になって私たちの前に現れてくる。

フロイトがドイツ語の「不気味なモノ(das Unheimliche)」という言葉で分析し、「親しいもの、見慣れたもの、快いもの(Heimliche)」の否定形であるこの言葉が生み出す感覚について、「昔から馴染んでいるものに還元するある種のおそろしいもの」「秘密で隠されているべきはずのものが外に出てきたようなもの」であるといっているが、山本の作品の一番の魅力は、彫刻の「モノ」としての存在感もさることながら、まさにそういう「不気味さ」をあわせもっていることではないかと思う。心地いいと感じているのに、常にどこか不安がつきまとう感覚、モノに溢れた世の中に生きる私たち現代人の感性を暴露しているようにも思えた。(hina)



## CULTURE, MOVIE, DRAMA, MUSIC & BOOK

### 『美術の物語』

E.H.ゴンブリッチ著、天野衛他訳  
ファイドン株式会社 2007年

これほど有名な美術の本をこの欄で取り上げるのは、いささか気が引けるところもあるのですが、でもまだお読みでない方が大勢いらっしゃるのと信じて書くことにします。小説でも映画でも音楽でも、自分が経験すると、その素晴らしさを他人に伝えたくて仕方がないということがありますが、この本がまさにそうです。「どうか、だまされたと思って手にとって欲しい」周囲の誰彼かまわずそう告げたくなる、それがこの本なのです。厚さ5cmもある一巻本で、ページ数は約700ページ。そして価格は7000円程と聞くと、それだけで怯んでしまうかも知れません。おまけに、表紙は著者の名前と本のタイトルが記してあるだけで、およそ愛想というものがまるでありません。小難しい美術用語を羅列した、一読して眠くなるような美術史の専門書、と誤解されても仕方ないでしょう。しかし、とにかく本を繕いて、「はじめに」と題された著者の序文を読み始めるや否や、そのような先入観が全くの間違いだったことに気づきます。「そうそう、自分が美術の本に求めていたのはこれだったのだ」と読み進むうちになんだか訳も分からず嬉しくなってきた、ニコニコしながら半ば興奮状態で自分の膝を何度も打つ、という希な経験を重ねることになるのです。愛想のない表紙には丸いシールが貼ってあり、「売上部数700万部突破。世界で一番売れている美術の本」というキャッチコピーが踊っていますが、なるほどあの言葉は嘘ではなかった

## 協力会通信

### 協力会の秋のツアー「沖縄の旅」

今年の協力会の秋のツアーは、初めての海外でした。といっても、パリでもメキシコでもなく、沖縄。昨秋開館したばかりの沖縄県立博物館・美術館をメインに、世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺跡群」を巡る旅でした。季節外れの台風に見舞われた昨年の横須賀とは対照的に、今年の沖縄は絶好の日和で、夏のように半袖シャツだけでOKでした。

初日、まずは首里城へ。週末とあって、守礼の門から王城まで、観光客で溢れ返っていましたが、琉球王朝に関連した周辺の遺跡、玉陵(陵墓)と識名園(別邸)では、観光客も少なく、ゆったりした時間を過ごせました。それから沖縄県立博物館・美術館へ。米軍基地の跡地の再開発の中心施設として計画されながら、日本経済の景気の波に翻弄され、それを乗り越えてようやく開館に漕ぎ着けた念願の博物館・美術館です。まるで沖縄の美ら

と気づくまでにそれほど時間はかかりません。例えば世界で一番有名な絵「モナ・リザ」の迫真的な顔の表現について、ゴンブリッチはこう語ります。「まず感じられるのは、リザが驚くほどに生き生きしていることだ。生きた人間のように、目の前の表情が変化する。見るたびに少し表情が変わったように思える。この絵を写真で見てもそんな奇妙な感じを受けるのだから、ルーヴル美術館で本物の前に立つと、薄気味悪いほどだ。こっちをあざ笑っているようにも見えるけれど、ときには、そのほほえみに寂しさが見えたりもする。こんな言い方は神秘めかして聞こえるかもしれない。だが、絵そのものが神秘的なのだ。すぐれた芸術作品にはこういう不思議なことがよく起こる」。どうです。今すぐにもルーヴル美術館に飛んでいきたくありません。もちろんこんな感覚的な表現だけでなく、モナ・リザの複雑な表情が「スファート」と呼ばれるぼかした表現に起因するものであったり、科学的な精神に基づく写実と大胆な創意の組み合わせの中にこの絵の不思議が存在する、といった論理的な分析も披露されています。1950年に初版が刊行されたこの本は、その後10数版を重ねる大ベストセラーとなりましたが、最新版では図版が全てカラーで掲載されており、しかも極めて高水準の画質ということもあり、解説を読む楽しさがさらに増えています。最後に日本語訳の素晴らしさをご紹介します。名著の名訳というのは、まさにこういう本のことをいうのでしょうか。ゴンブリッチの平易で親しみやすい語り口が見事な日本語に置き換えられており、翻訳文を読む時にしばしば感じさせられるあの煩わしさがどこにもありません。とにかく今すぐ本屋さんへ。懐の寂しい方は図書館へ。豊饒なる美術の海へ、この本を携えて船出しましょう。(F)

海から浮上した白い珊瑚の甲羅に守られた巨大な海亀のような建物のなかに、沖縄の古代から現代までの自然と歴史、文化と美術を総合的に紹介した充実の文化施設でした。

二日目は、まず城壁の石垣の独特な曲線の美しい座喜味城跡へ。遥かに彼方に那覇の街が望める絶景に一同見とれました。それから佐喜真美術館へ。米軍の普天間飛行場に隣接した私立美術館で、丸木位里・俊の「沖縄戦の図」などのコレクションからは、館長・佐喜真道夫氏の「反戦・平和」への「もの想う場」を作りたいという熱意が伝わってきました。その後、浦添市美術館で琉球漆器の名品をじっくりと鑑賞して、最後は斎場御嶽(最高の宗教施設)を見学して、帰路に。読者の皆さんも協力会に入って、来年のツアーに参加してみませんか。(sy)



沖縄県立博物館・美術館の前で(2008年)

**展評** 2008年11月12日(水)～11月24日(月)  
名古屋市民ギャラリー矢田

## drawings—考える手

近年、美術の分野に於いて「絵画」は完全に復権を果たした。1970年代末以後、ミニマル・アートの「遺産」を引き継ぎ、空間を演出して見せてきた「インスタレーション」は、今日では、すでに前世紀のスペクタクルとしての懐かしささえ感じさせる。絵画のなかでも内省的、よりよく言えば「ナラティブ」とも呼ぶべきドロイング表現が隆盛を極め、さらにその受容のされ方もかなり変容し、見直されつつある。

この地方に関係する8名の作家(浅野弥衛、竹田大助、櫃田伸也、伊藤誠、長谷川繁、登山博文、杉戸洋、多田友充)の作品と、若手3人(田口美穂、鋤柄ふくみ、柿栖早紀)の公開制作によって構成された本展覧会は、正しくタブローとは全く別の、自律した表現としてのドロイングの、今日的意味と位置を見せるものであった。

先駆としての浅野弥衛や竹田大助の作品では、「オートマティスム(自動筆記)」や、オールオーバーに展開し、葛藤するかのような「痕跡」から、視覚と意識、主体と表現についての問題が浮かび上ってくる。また、公開制作では、パフォーマンスの臨場感が楽しめた。

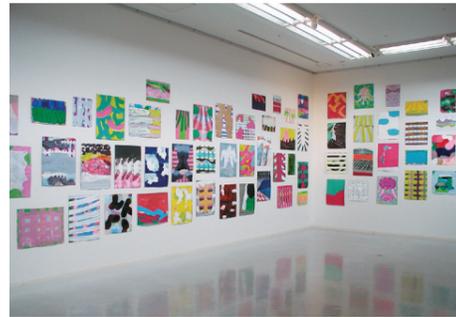
展覧会構成に当ってドロイングを「線描」でも「草稿」でもなく、さらには「発表」からも

切り離された「制作」という一面から捉え、作家のアトリエから持ち出されたドロイングは、作家ではなく、企画者によって展示された。「見せる」という作家の意識を最小限に抑え、「制作」よりも「生活」から生み出された表現を観る者に強く印象付けるその手法は、「結果」としてのタブローと「経過」としてのドロイングという観念を揺さぶる。

今回、ペンキによって描かれた108点にも及ぶドロイングが「展示された」登山博文は、会場に次のようなステートメントを寄せていた。

「自らの手で問われた得体の知れないものとのコンタクトに我慢できるかどうか、継続も始まりもない制作、それがドロイングという目的である。」

展示された登山の作品は、その言説以上にドロイングそのものについての優れた考察と分析の成果を見せるものであった。(J.T.)



## イベントガイド

### ■ 特別展 視覚の魔術—だまし絵

絵の中の世界が本物に見えたり、視点を変えると別の姿が見えたりする「だまし絵」の驚きを紹介する展覧会。有名なアルチンボルドの「合成人頭」や、ダリ、エッシャー、歌川国芳など、古今東西の不思議な絵画を展示します。  
会 期：4月11日(土)～6月7日(日)  
入場料：一般1,300円、高大生900円、小中生500円



ジュゼッペ・アルチンボルド(ヴェルトゥムヌス(ルドルフ2世)) 1590年頃  
スコーロステル城(スウェーデン)Skokloster Castle, Sweden

### 関連催事

#### ○記念講演会

「幕末・明治期のエンタテイメント絵画—描表装を中心に」

4月11日(土) 14時～  
講堂 先着180名 無料  
講師：山下裕二氏(明治学院大学文学部教授)

「だまし絵—表層のレトリック」

5月10日(日) 14時～  
講堂 先着180名 無料  
講師：谷川 渥氏(國學院大学文学部教授)

#### ○作品解説会

4月26日(日)、5月24日(日) 14時～  
講堂 先着180名 無料  
講師：保崎裕徳(当館学芸員)

#### ○ボランティアによるギャラリートーク

4月22日(水)、23日(木)、24日(金)  
5月13日(水)、14日(木)、15日(金)、20日(水)

21日(木)、22日(金)、27日(水)、28日(木)、29日(金) 10時30分～/13時30分～  
※関連催事は都合により変更・休止する場合があります。

### ■ 常設企画展 特集：コレクションのなかの「だまし絵」?

特別展「視覚の魔術—だまし絵」の開催にあわせて、名古屋市美術館のコレクションのなかから、多様多彩な「だまし絵」(にも見えるものも含めて)を探し出して紹介します。  
会期：4月11日(土)～6月14日(日)

### ■ コレクション解析学2009—2010

学芸員が当館のコレクションから特定の作品をとりあげ、その魅力などを紹介する講座です。14時～ 講堂 先着180名 無料

#### ○第1回 5月31日(日)

作品：マリー・ローランサン《サーカスにて》1913年頃

演題：若きローランサンの世界  
講師：原沢暁子(当館学芸員)

### ■ 名古屋市美術館「キッズの日」

○アート・ウォッチング  
美術館にある絵や彫刻を「よく見て」たのしむプログラムです。

対象：小中学生と保護者(高校生以上)  
参加費：1名50円(ただし、保護者は別途常設展観覧料が必要です)

定員：10組  
日時：5月30日(土) 10時～12時

申込締切：4月30日(木)

○なりきりアーティスト  
よく見て「つくって」考えてたのしむプログラムです。

対象：小学生  
参加費：1名300円

定員：30名  
日時：6月28日(日) 10時～12時

申込締切：5月31日(日)

※ 申込方法など詳しくは当館ホームページ(<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/>)をご覧ください。

### 【編集後記】

寒かった冬が終わり、そろそろ春の息吹が感じられる今日この頃ですが、皆様いかがお過ごしですか。今回は合併号ということで、通常よりも遅い発行となり、読者の皆様をお待たせすることになってしまいました。これまでの20年間、アートペーパーは季刊の発行でしたが、今年度からは年3回のお届けになります。回数は減ってしまうのですが、これまでよりもいっそう内容を充実していくよう職員一丸となって頑張っております。何卒、ご理解と変わらぬご支援を宜しくお願いします。さて、今年度最初の特別展は「視覚の魔術—だまし絵」展です。私たちの視覚を欺く古今東西の作品を紹介します。今年の特別展はいずれも一つのテーマを切り口に様々な作品をご紹介します。このようなテーマを絞った展覧会は、それぞれの作家の作品世界を展開しながら、展覧会として一つの世界観を持ったものとして構成しなければなりません。一人の作家の作品世界をじっくり見せるのとは別な手腕が、企画する側に問われます。選び抜かれた作品によって展開されるこだわりの展覧会をどうぞお楽しみください。(hina)

アートペーパー第80号 発行日：2009年4月1日

発行 名古屋市美術館 [白川公園内]

<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/>

〒460-0008

名古屋市中区栄二丁目17番25号

地下鉄「伏見駅・大須観音駅」下車

Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005

休館日：毎週月曜(祝日の場合は翌日)

Nagoya City Art Museum